

報告 ソフィア哲学カフェ

堀越耀介

はじめに

本報告では、上智大学グローバル・コンサーン研究所における「ソフィア哲学カフェ」についてレポートする。そのため、まずはソフィア哲学カフェという企画の経緯や歴史、また「哲学カフェ」というムーブメントについてまとめ、最後に、2019年度に堀越が担当したソフィア哲学カフェの内容について簡単にレポートしたい。

1. ソフィア哲学カフェ

上智大学グローバル・コンサーン研究所（以下 IGC と略記）の企画として「ソフィア哲学カフェ」が始められたのは、2014年。「哲学カフェ」とよばれるムーブメントを、2000年代から本邦で先駆ける実践してきた寺田俊郎所員が、IGCの理念や社会正義にまつわるテーマを設定し、進行役を務めてきた。これまで、自由、幸福、命、他者理解、差別といったテーマについて対話し、年に2～3回の頻度で、主に研究所内スペースにて開催してきた。

また、IGCの他企画である「平和と正義」を考えるブックフェア開催時（2015年）には「人権」をテーマに、「連帯経済」にかんするブックフェア開催時（2017年）には、「よく生きること」をテーマに哲学カフェを開催するなど、他企画との連携も積極的に行ってきた。一概には言えないが、年々参加者は増加の一途をたどっており、2017年のある回には30人を超える参加者が集まったこともあり、翌年からは予約制を導入する運びとなった。

近年では、類似企画として「シネマ哲学カフェ」という試みも始められた。前半部では映画上映会を行い、後半部で上映した映画にもとづいた哲学対話を行うのが、シネマ哲学カフェの趣旨となっている。

2017年には、ろう者の方々によって作られた音楽の世界にいざなう無音映画『LISTEN』を上映し、シネマ哲学カフェを開催した。「はたして音楽とはいったい何であるか」を考えずにはいられない、大変貴重な経験となったと、多くの参加者の方から感想をいただいた。当日は、映画製作者を招いてのトークセッション、ろう者の方を含めた手話通訳付きの哲学対話、一切話さずに言いたいことを紙に書いて進行する「対話」など、まったく新しいタイプの哲学対話も試みられた。

2018年には、映画『ある精肉店の話』をもとにしたシネマ哲学カフェを開催し、食、差別、動物の命といった極めてラディカルな話題にも切り込んだ。視覚的には、少々刺激の強いシーンなどもあったものの、大変多くの方々に来場していただき、シネマ哲学カフェ

の企画の潜在性と有効性にあらためて気づくきっかけとなった。

2019年は、当該年度に寺田所員がサヴァティカルということもあり、それまで研究所リサーチ・アシスタントを務めた堀越が、IGC 客員所員として哲学カフェの進行役を務めている。本年度は、平和、自己責任、平等という3つのテーマをめぐり、哲学対話を行った。

2. 哲学カフェ

そもそも哲学カフェは、20世紀末にフランスで、マルク・ソーテという哲学者のもと偶発的に始まったとされる。「哲学」と言えば、しばしば、哲学書を片手に書齋にこもるような人をイメージしがちだが、哲学カフェはといえば、コーヒーを片手に喫茶店で哲学談議にいそしむという少々風変わりな活動でもある。

元々の哲学カフェでは、参加者同士が名乗らずに集まって話し合い、終わり次第ただ解散するというのが常だったという。これは、肩書や所属、名前によって人物が特定・規定されることにより、アンバランスな権威関係が発生したり、特定の参加者が発言しにくくなるといった事態を防ぐ効果を持つ。また、寺田所員によれば、匿名で開催される哲学カフェは、特定の文脈やパーソナリティを介さずとも共通の問題について語り合えるという、「市民であること」の訓練の場でもある。こうした理由や経緯を踏襲し、IGCでの哲学カフェも基本的にはこのスタイルで開催されている。

他方で、哲学カフェには、必ずしも特定のスタイルや方法論があるわけでもない。進行役によって実に様々な形があるし、あってよい。とはいえ、はじめに問いを設定し、それについて進行役のファシリテーションのもとに対話を行うというのが、その核となる場合が多い。こうした対話を行うにあたり、シネマ哲学カフェのように映画を出発点にしたり、本を読むこと、芸術作品を鑑賞することをきっかけとして行われたりすることもしばしばだ。

進行役によって、進行上の方針や約束事が設定されることもある。私が本年度IGCで哲学カフェを行った際には、おおむね次のようなことを意識してもらえるよう参加者に事前に伝えた。以下にその概略を提示しておきたい。

- ・哲学カフェでは、普段は話しにくいようなことでも、遠慮なく自由に発言していい。
- ・ただし、人を中傷するようなことは言わないよう心がける。
- ・とはいえ、人を中傷することと、理由を挙げて反論することは異なる。
- ・話すことよりも、聴くことに注意を払い、他者の発言に応答しようとする。
- ・問いに答えることよりも、問いを重ねていくこと。
- ・哲学カフェは、単なる情報・意見交換会ではなく、探究の場であるということ。
- ・他人から聞いたこと、本で読んだこと、ネットの情報ではなく、自分の経験から話すこと。

・ディベートではないので、意見が変わること、意見が間違っていたとわかることは、むしろ望ましいということ。

3. 今年度のソフィア哲学カフェ

さいごに、今年度に行われたソフィア哲学カフェの内容を簡単に紹介して、本報告を締めくくりたい。今年度は、5月16日「平等」、7月4日「自己責任」、8月21日「平和」、の三回（いずれも17:30~19:00）にわたり、IGC 所内スペースにて開催した。どのテーマも、IGC の設立理念や社会正義にかかわるテーマを、進行役である堀越が事前に設定し、参加者を募る形で開催された。

はじめに申し上げておかなければならないのは、参加者への心理的な配慮や進行役の負担という観点から、基本的に録音や記録を取らない形でソフィア哲学カフェは行われているという点である。従って以下の報告は、決して各回の対話の概略でもなければ、議論の筋をおったものでもなく、あくまで進行役の記憶と印象に残った範囲でのレポートであるということ、あらかじめお断りしておきたい。

さて、「平等」をテーマにした第1回ソフィア哲学カフェでは、「平等」と似たようなニュアンスで使われる「公平」や「公正」という言葉について検討するところから始められた。これらの言葉がもつ意味にかんじて各参加者が持つ印象は大変多様であった一方で、「何についての」平等が問題とされるのか、もっといえば、「平等でなければならないこと」を同定することが重要であることが確認された。

この点について、必ずしも特定の基準が明確になったわけではなかったものの、体の大きな人と小さな子ども、目の見えない人と目の見える人といった、諸個人の差異を無視して平等を志向する政策を採用するのは誤りであるとか、平等であるべきことと、そうであるとむしろ問題である場合とがある、といった意見が比較的良好に支持されていたことが印象的な会であった。

次に、第2回のソフィア哲学カフェでは、昨今よく聞かれる印象のある「自己責任」をテーマに哲学対話を行った。まず、自己責任という言葉が使われる具体的な場面について、簡単に何例か出してもらうことから始めた。「危ないといわれている地域に自ら入ったら、それは自己責任だ」、「想定された使用法を超えて製品を使うのであれば、それは自己責任だ」といった文脈で使われるという例などがあげられた。

しかし、こうしたことを表現するのに、なぜ単に「責任」という言葉では不十分なのだろうか、という指摘があったのは印象的だった。そもそも責任というものが原則的に個人に帰せられるものであることは、この語の日常的な使用法からでも十分に読み取ることができるからだ。

これに対して「自己責任」という言葉は、「特定の選択の結果に対して何らかの応答を行う責務」という本来の意味を失っているのではないか、という意見が出されたのは興味深

い。というのも、自己責任という言葉が使われる際、少なくない場合で、人と異なることを行うことや常識から外れることに対する非難・侮蔑の意味が含まれているからだ。すなわち、ある意味で、この言葉は同調圧力を表現するために使われるのではないか、ということである。

また、自己責任という言葉は、本来は個人の責任の範囲外にあるようなこと、つまり、個人の選択の結果であるとは言い切れないことまでも、個人に押し付けることを正当化するための言葉なのではないかという意見も見られた。全面的にとはいえないまでも、社会や他者が少なくともその部分を引き受けるべきであるような行為や状態を、個人に負わせるための「呪文」として、使用されることがあるという意見も印象に残った。

さて、第3回のソフィア哲学カフェでは、「平和」をテーマにした。単に終戦記念日のある8月に開催する哲学カフェだからということも、確かにこのテーマを選んだ理由だった。しかし決定的だったのは、以前とある哲学カフェで、「学校で行われる平和教育が、しばしば『とにかく戦争は恐ろしいもの』というイメージや圧倒的な経験談にもとづいていることがあり、それについてよく考えたり意見をもったりするよりも、しばしば閉口するしかないと感じる」という意見から「平和」についての哲学対話が行われたことが、このソフィア哲学カフェを企画する大きな動機となった。

まず、対話を始めるにあたって、「平和」という言葉が持つ意味があまりにも漠然としている、という意見が参加者間で共有された。「社会が安定した状態」、「自分の身体が脅かされるような危険のないこと」、「コンフリクトのない状態」、など様々な意味が見いだされた。このうち、「コンフリクト（争い、衝突）のないこと」という状態をひとまず平和の条件としてみることになった。

しかしながら、(武力衝突や生命の危険にはかかわらない日常的な)争いや衝突がまったくなくなるのがよいかというと、おそらくそうでもないという意見も見られた。なぜなら、こうしたコンフリクトを抑圧することによって、むしろ不満や怨恨が忍耐のうちに蓄積され、いつか暴発するということになりかねないからである。この意味で、少なくとも、単に平和が大事と言うだけで「事なかれ主義」に陥ってしまうことは、むしろ平和を導くことにならないという観点は、大変示唆的であった。

おわりに

哲学カフェは、必ずしも具体的な問題の解決策や全員一致の結論を出すことを目的としているわけではない。今年度いずれのソフィア哲学カフェにおいても、こうした「落としどころ」にたどり着いたことは一度もなかった。もちろん、IGCでの哲学カフェは、広く社会正義にかんするテーマを扱うことが多く、その意味では抽象的な哲学的問いよりも、比較的具体的な話題にも切り込んでいく。とはいえ、安易に伝聞や検討しきれない経験的・数量的研究結果を持ち込むのではなく、私たち自身の経験から、私たちの言葉で、問題の

所在をつかむこと、問いを更新していくことを目指すことが、哲学カフェの趣旨といえるのではないだろうか。他の IGC 企画に比べれば小規模なソフィア哲学カフェだが、今後も上智大学の片隅で、細々とでも続けていければ幸いである。

堀越耀介（ほりこし ようすけ）（東京大学）